

市長 慰霊のことば

厳しい暑さが続く中、今年も終戦の日を迎え、ご遺族をはじめ、多くの皆様ご参列のもと、第二次世界大戦戦亡者慰霊祭を執り行うにあたり、戦亡者の御霊に謹んで哀悼の誠を捧げます。

世界中で数千万人にも及ぶ尊い人命が失われた第二次世界大戦の終戦から、71年目を迎えました。

我が国においては、この大戦で、数多くの方々が、祖国を思い、家族の幸せを案じながら犠牲になりました。また、各地への激しい空襲や、広島・長崎への原子爆弾の投下により、国土はまさに壊滅的な被害を受けました。

私どもの郷土、鹿児島市も、8回にわたる空襲を受け、市街地の約93パーセントが焼失し、多くの市民がお亡くなりになるなど、筆舌につくしがたい悲惨な体験をいたしました。想像を絶する状況の中、かけがえのない家族や友人を失った深い悲しみに耐え、幾多の苦難を乗り越えてこられたご遺族と関係の方々に、改めて深く敬意を表する次第であります。

戦後、我が国は、一貫して平和国家としての途を歩み、世界に類を見ない短期間で経済発展を成し遂げ、国際社会において重要な役割を担うまでになりました。

本市も、市民の皆様の弛まぬご努力により、焼け野原の中から見事に復興を成し遂げ、今では人口60万人を擁する日本の南の交流拠点都市として、着実な発展を続けております。

しかしながら、国際社会に目を向けますと、今なお、国家間や地域間、民族間の対立・紛争が繰り返されており、こうした状況を見聞きするたび、核兵器の無い、平和な世界を実現することの難しさを痛感いたします。

このような中、今年5月27日には、バラク・オバマ アメリカ大統領が、現職の大統領として初めて広島を訪問され、核兵器のない世界を追及する重要性を訴えられるという歴史的意義のある出来事がありました。また、原爆が投下された8月6日、9日の両日、広島市長、長崎市長が平和宣言を行い、核兵器廃絶と世界の恒久平和の実現に向けた力強い決意を述べられました。世界中に一日も早く平穏な日々が訪れることを念願してやみません。

本市では、平成2年に「平和都市宣言」を行い、あらゆる国の核兵器の全面廃絶や世界の恒久平和の達成を願うとともに、戦争による惨禍を二度と繰り返さないことを誓いました。

その一環として、毎年、「鹿児島市の戦災と復興資料・写真展」を開催しているほか、市内の小学生・中学生から平和に関する標語を募集し、多くの市民の皆様に平和のメッセージを発信しております。さらに、戦争の悲惨さや復興のための先人の努力、平和の尊さを次の世代に伝えていくため、戦災・復興に係る資料の募集を続けております。

戦後70年以上が経過し、我が国は、私も含め5人に4人が戦後生まれとなりました。今を生きる私たちには、悲惨な戦争の教訓を次世代に語り継ぐ責務があります。

終戦の日である8月15日を迎え、私たちは、いま一度不戦の誓いを新たにし、戦争の記憶の継承に努め、世界の恒久平和実現に向けて一層の努力を続けてまいりますことをここに固くお誓い申し上げます。

結びに、戦亡者の御霊のご冥福を心からお祈りいたしますとともに、ご遺族の皆様方のご健勝と、鹿児島市の限りない発展を祈念いたしまして、慰霊のことばといたします。

児童代表 慰霊のことば

「かげおくりのよくてきそうな空だなあ」出征する前の日青い空を見上げたお父さんがつぶやきました。ちいちゃんとお兄ちゃんは、いろいろなかげを空におくりました。しかし、この町の空にも、焼夷弾や爆弾をつんだ飛行機がとんでくるようになりました。そうです。広い空は、楽しいところではなく、とてもこわいところになったのです。そして、夏のはじめのある朝。小さな女の子のいのちが空に消えました。

私は3年生の国語の授業であまんきみこさんの「ちいちゃんのかげおくり」を学習しました。普通に暮らしていた幼い少女ちいちゃんが戦争によって家族、命、未来をうばわれてしまう悲しい物語です。私とその作品を音読する度に、母は泣いていました。当時の私は、「なぜそんなに泣くのだろう。」と不思議に思っていました。そのことをきっかけに、新聞で伝えられる戦争に関する放送や記事を気に留めるようになりました。

全国各地での空襲、零戦という戦闘機に関わった人々の悩み、原爆投下、敗戦後の生活……。どれもつらいものばかりでした。私はそれらの出来事を知っていくうちに、戦争体験談に自分や家族を重ねるようになっていました。もし、大好きな父が戦争に行ってしまったら……。もし、大好きな家族や友達が空襲でいなくなってしまうたら……。そして、何より自分が明日生きていられないかもしれないという不安の毎日を過ごすとしたら……。考えただけで怖くなりました。

ある日本人兵士が戦地から家族へ書いた手紙を実際に読む機会がありました。一番つらいのは死んでしまうかもしれない自分なのに、自分のことより家族のことを心配し、「家族や国の未来のために戦います。」という内容ばかりでした。本当はもっと家族や友達と一緒にいて話をしたり夢に向かって頑張ったりしたかったのではないかと私は思います。そのような小さな願いさえも叶わなかった人がたくさんいたと思うと、涙が止まりませんでした。

また、生きて戦場から帰ってきても、「生きて帰ってきたことは恥ずかしいことだと考えたり、戦場での自分の行動を後悔して自ら死を選んだりした人もいた。」とも書いてありました。今の私たちの平和は、厳しい時代を一生懸命生きてきた人々の歴史の上にあるということを実感しました。今なら私の音読で泣いていた母の気持ちが分かります。

71年前の今日、8月15日に長かった戦争は終わりをむかえました。しかし、戦争を体験された方々のつらく苦しい記憶に終わりはありません。その方々のため、戦争で亡くなった方々のため、今を生きる私たちのため、そして生まれてくる命のために、今一度平和についてみんなで考えていきましょう。そして、「戦争の悲しい記憶を決して忘れず、このような悲劇を二度と繰り返さない。」と誓い、その思いを次の世代へとつなげていきましょう。

終わりに、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに遺族の皆様の心の平和をお祈りして慰霊のことばといたします。

平成28年8月15日 鹿児島市立名山小学校 6年 和田 倭実

生徒代表 慰霊のことば

平成 28 年第二次世界大戦戦亡者慰霊祭の開催にあたり、慰霊のことばを申し上げます。

本日、平成 28 年 8 月 15 日で、第二次世界大戦が終結してから 71 年を迎えました。毎年、この日の正午になると、サイレンにあわせて黙とうをし、戦争と平和について考えます。この戦争で鹿児島でも多くの人々が命を落としました。昭和 20 年 6 月 17 日、鹿児島市は、大空襲により、焼け野原となり、何の罪もない多くの人々が命を落としました。また、県内には、4 つの特攻基地があり、そこからたくさんの若者が飛び立っていきました。今、この美しい青い空の下、何不自由なく平和に暮らしている私たちには、とても想像のつかないことです。私たち若い世代は戦争の本当の恐ろしさを知りません。実際に体験談を聞く機会も少なくなり、私たちは戦争についての関心が薄くなってきているとも言われています。私たち若い世代はこのまま戦争を知らない世代でいてよいのでしょうか。

戦後、日本は新しい日本国憲法のもと、軍を持たず、平和国家として世界平和を実現するために取り組んできました。しかし、世界各地では、依然としてテロや地域紛争が後を絶たず、今もなお多くの人々が命を落とし、傷つき、苦しんでおり、世界平和への道のりはまだまだ遠いことを痛感させられます。

今年の 5 月、伊勢志摩サミットの際に広島を訪れたオバマ大統領は、スピーチの最後に、「今日、広島子どもたちは平和な日々を生きています。なんと貴重なことでしょうか。この生活は守る価値があります。それをすべての子どもたちに広げていく必要があります。その未来こそ私たちが選択する未来です。」と述べていました。広島に限らず、日本中で私たちは平和な日々を過ごしています。しかし、71 年前には、夢や希望を抱きながらも戦争によって犠牲になった多くの人々がいたことを忘れてはなりません。そして、平和な未来のために何ができるかを日々考えながら、生きたくても生きられなかった人達のみまで、精いっぱい生きること。それが今の私たちにできることではないでしょうか。

戦争は二度と起こしてはいけません。また、戦争の歴史を風化させてはなりません。戦争によって失われた多くの命の尊さを忘れず、戦争の悲惨さと平和の大切さを私たちが未来へ伝えていきます。

最後に、世界から戦争、争い、対立をなくすため、命の尊さについて考え、共に協力し、平和な未来を築いていくことを誓い、慰霊の言葉といたします。

平成 28 年 8 月 15 日 鹿児島市立長田中学校 3 年 櫻木 鈴之介